平成22年度 播磨町郷土資料館特別展
“オポナカムラ”とその時代

“オポナカムラ”（大中遺跡）の発掘調査が始まってから、まもなく50年が経過します。その間、各地での調査研究が進み、“オポナカムラ”のイメージも随分、変わってきました。

本展示会では、播磨各地の遺跡から発掘調査で出土した同時代の品々と見比べながら、“オポナカムラ”の最近の研究成果を紹介します。

▼**開催期間** **10月3日(日)～11月23日(祝)**
▼**開館時間** 午前9時30分～午後5時
月曜日は休館（月曜日が祝日の場合は、翌日休館）
▼**場所** 播磨町郷土資料館 展示室
▼**観覧料** 無料
▼**問合せ** 郷土資料館 ☎079（435）5000

“オポナカムラ”って？

展示のなかで子どもたちが最も興味を示すのは、再現された弥生時代のことばです。弥生時代には「大中村」を“オポナカムラ”と発音していたらしいことから、遺跡の正式名称である「大中遺跡」のほかに、多くの方々に一層親しんでいただけるよう、大中村の栄えた時代を“オポナカムラ”という愛称で呼ぶことにします。

“オポナカムラ”の時代

2世紀（1900年前）、いよいよ“オポナカムラ”の始まりです。“オポナカムラ”の時代は、女王卑弥呼のいた邪馬台国のあった年代と重なっていますが、なぜ、この地に人びとが暮らすようになったのか、1750年前ごろ、急激に村の規模が小さくなったのか、決定的な考えはまだありません。

銅鐸（どうたく）のまつりの終わり

青銅器の道具である銅鐸は打ち鳴らし、米の豊作を願う村のまつりに用いられました。銅鐸は、時代を経るごとに大きさを増し、打ち鳴らすことができないくらい巨大化していきます。これが最後の銅鐸の形で、ついに数百年続いた銅鐸が役目を終えます。一方、弥生時代の終わりごろ、各地で大型の墓が造られるようになります。村びとの目前で豊作を祈るまつりから、巨大な銅鐸を用いて首長が密かに祈る段階へ、さらに人々の守る霊や稲の神に祈る場所が、飾られた特殊な壺や器台を用いた墓での儀式に変化していったようです。

▲墓のまつりに使われた特殊な土器（赤穂市有年原田中遺跡）
写真提供：赤穂市教育委員会

▶巨大な最後の銅鐸（川西市栄根銅鐸）
写真提供：東京国立博物館

中国製の鏡と国産の鏡

2000年前ごろまでは、北九州地域で、中国の歴史書に登場するクニの首長の墓から大量の鏡が出土していますが、近畿地方の墓からは目立った副葬品が見当たりません。

近畿地方では“オポナカムラ”の時代になって、打ち割られた破片の鏡や国産の小さな鏡が各地で使われるようになり、鏡への憧れが始まったのでしょう。こうした弥生時代の鏡は、兵庫県だけでもすでに26遺跡から出土しています。

◀日本で作られた弥生時代の鏡（神戸市玉津田中遺跡）
写真提供：兵庫県立考古博物館

ペンダントとして使用された打ち割られた鏡▲（神戸市吉田南遺跡）
写真提供：神戸市教育委員会

土器の形の変化

遺跡から最もたくさん見つかるのは土器です。土器には貯める・煮炊きする・食べ物を盛るなど、様々な形のものが作られました。土器を細かく観察すると形や作り方などが次々に変化していることがわかります。

さらに、各村々で作られた土器のほか、遠方の地域から運ばれた土器も見つかることがあり、それぞれの地域間で交流があったことがわかります。

▲“オポナカムラ”の隣村で使われた土器（加古川市坂元遺跡）
写真提供：兵庫県立考古博物館

記念講演会

石野博信先生が語る 邪馬台国時代の播磨

▶**日時** 10月24日（日）
13：30～15：00
▶**場所** 中央公民館 視聴覚室
▶**参加費** 無料
▶**定員** 120人

●関連の催し

①遺跡公園の木の実でペンダントを作ろう
▶**日時** 10月11日（祝）
13：30～（約2時間）
▶**定員** 15人
（事前申し込み必要）

②古代米を炊いてみよう
▶**日時** 11月21日（日）
13：30～（約2時間）
▶**定員** 15人
（事前申し込み必要）

③土器・土笛を作ってみよう
▶**日時**
10月9日（土）、10日（日）、24日（日）、30日（土）、11月13日（土）、14日（日）
13：00～（約1時間）
▶**定員** 各回10人

④大中遺跡まつり
▶**日時** 11月6日（土）
10：00～

⑤館長による展示解説会
▶**日時**
10月23日（土）、31日（日）
13：30～（約1時間）

※③のみ有料、それ以外は無料
▶**問合せ** 郷土資料館
☎079（435）5000

同時開催
「いせきくん・やよいちゃん」原画展